

第3章 イントネーションの類型化とその談話別分布

本章では、実際の談話に現れた文末、句末イントネーション(注1)について統計手法を用いて6種に分類する。また、それぞれのイントネーションの音声的特徴、文法的機能、談話における機能を概観した上で、談話タイプごとに各型の現れ方の異同を明らかにする。

第1章で述べたように「話調」の形成に重要な役割を果たすと考えられる句末イントネーションに関しては先行研究が少なく、客観的な類型化がなされていない現状を踏まえ、第一にイントネーションの客観的な類型化が不可欠の作業であると考えた。

そこで3-1で述べるように、現代日本語の句末イントネーション類型でもっとも妥当だと考えられる上村(1989)の類型をもとに、仮説として「平調」、「上昇調」、「強調」、「昇降調」、「停滞調」、「下降調」の6種に再分類した。そして、この6分類について3-2では、談話音声資料から各イントネーションの物理的な数値データを利用し判別分析を行なった。その結果、この6類型で約80%の判別的中率が得られた。この6類型が統計的には妥当な類型であったことを示す結果だと言えるだろう。さらに3-3においては、終助詞や間投助詞の音調についても同様に分析を行ない、終助詞の有無による音調の違いについてイントネーションごとに明らかにした。その上で、3-4では第2章で扱ったいわゆる「尻上がり」イントネーションを含めた上記6種のイントネーションについて、実際の資料をもとに談話・文法上の機能について概観した。これらの作業を踏まえ、3-5では談話種別ごとの各イントネーション型の出現頻度、つまり6種の句末イントネーションの分布状況を明らかにした。

談話種別ごとに各イントネーション型の分布が異なっているということは、それぞれの談話ごとに異なった何らかの音調上の特徴が見られるということの意味する。これが即「話調」であると断言することはできないが、「話調」の形成に不可欠であると考えられる句末イントネーションの分布状況という、一つの客観的な視座から各種談話を捉えなおしたことは、「話調」の科学的分析の第一歩となるだろう。

3-1. イントネーション分類

イントネーション(特に文末)の類型化に関しては、いくつかの試みがあることは、第1章でも言及した。その際、文末以外に現れるイントネーションについても言及のある上村(1989)の分類がもっとも詳細かつ妥当な分類であることを指摘した。ここでは、上村(1989)の現代日本語イントネーション分類をもとに、今後イントネーションを記述していく上での、より適切な

分類方法を考える。

3-1-1. 上村の現代日本語イントネーション分類

上村(1989)は文末イントネーションに6種、「基本音調」、「のぼり音調」、「くだりのぼり音調」、「くだり音調」、「つよめ音調」、「ひくめ音調」を挙げた。そして他のイントネーション類型では、あまり例を見ない文末以外の休止直前のイントネーションに関しても、「基本音調」、「のぼり音調」、「くだり音調」、「つよめ音調」、「ひきのぼし音調」の5種を認めている。

上村(1989)は「基本音調」を「もっとも普通にみられる、音声的には unmarked な、機能的には中立的なイントネーションの型」としている。吉沢(1960)の「平調」にほぼ該当するものと考えられる。「のぼり音調」は最後の1音節を高く短く発音する型と、最後の音節を長めに発音する型の2つの変種とその中間の移行型を持つという。「聞き手に対する親密な、あるいは好意的な態度の積極的な表明にあると一般的には言える」としている。「くだりのぼり音調」は、最後の1音節を一度低くさげてから次に上昇調にする音調であり、最後の音節の持続がかなり長くなるもので、話し手の聞き手に対する不信、不満の念、反抗的態度をあからさまに表出する機能があり、「不信をあからさまに表現したといかえし文」(反問)となるという。「くだり音調」は幾分長めの最終音声中での急速なピッチの下降とそれに伴う強さ(intensity)の減少を特徴とし、話し相手の言明、態度、行動などに対する驚きの気持ちやあきれた感情などを伝えるものとしている。さらに「つよめ音調」は高さではなく、強さを主要な音声的手段とし、最後の音節だけを特に著しく強める音調で、話し手から聞き手への言明を押し付ける機能を持つと言う。「ひくめ音調」は短い発話に多く現れ全体が低く発音され、基本音調と同様ピッチと音量の下降がある。この音調による発話全体が先行する文に対する追加であることを知らせる機能を持ち、この音調を帯びる文の部分は機能的には先行する文の構文上の部分をなすという。

文末以外の休止直前のイントネーションの「基本音調」は文末のそれと同様 unmarked な形式の音調であり、文の内部の構文論的な切れ目の直前に現れ、機能的には中立的な性格を持つものだという。「のぼり音調」も構文論的な区切り直前の単語末尾の音節だけを特に高く、あるいは著しい上昇調で発音するもので、親密さや好意的態度の表出、文の不完結性の表示などの機能があるという。また、大勢への演説、説明などの際にもあらわれるという。ただし上村(1989)の説明からは、最近のいわゆる「擬似疑問」や「半クエスチョン」と呼ばれるものが含まれているかどうかは定かではない。「くだり音調」は末尾の音節だけをやや強く、長めに漸弱的に発音し、声の高さも下降となる音調だが、文末における驚きを表すくだり音調ほど著しい下降ではなく、

下降開始のピッチも低いという。これは第2章で扱ったいわゆる「尻上がり」イントネーション(「昇降調」)にあたると思われる。「つよめ音調」は、構文論的な切れ目の直前にくる単語の最終音節だけをあまり長めることなく強く発音するもので、話しの内容を強く念をおし、確認させながら話すという感じを伴うという。この非文末の「つよめ音調」と「のぼり音調」との区別については、やや曖昧である。上村(1989)によれば「つよめ音調」は、ピッチがまったく上昇しないか上昇がめだたない点で、「のぼり音調」と異なっているという。しかし日本語の強調はピッチ上昇を伴うのが自然であり、強めるだけの音調を想定するのは困難だし、どの程度が目立たない上昇なのかについては触れていない。いわゆる「先生口調」や「村岡花子調」はこの非文末の「つよめ音調」かあるいは「のぼり音調」に含まれるものと考えられる。最後に「ひきのぼし音調」であるが、これも出現する位置は「のぼり音調」、「くだり音調」、「つよめ音調」と同様で、「最後の音節の母音フォネームまたは撥音を同一の高さと強さで引き伸ばして発音される音調」であるとしている。単語ごとに挿入される「エー」、「アー」等と類似のものだという。

上村(1989)は、文末、非文末を分けた上で、以上の11種類にイントネーションを分類した。これらを共通の音調ごとにまとめると以下のように8種類に分類できるだろう。

「基本音調」(文末・非文末)

「のぼり音調」(文末では疑問や驚き、非文末では親密さ、好意的態度を表すいわゆる「先生口調」のような音調か?)

文末の「くだりのぼり音調」(強い疑念、反問)

文末の「くだり音調」(驚き、あきれ)

非文末の「くだり音調」(いわゆる「尻上がり」イントネーション)

「つよめ音調」(文末では言明を押し付ける、非文末では念を押し、確認させながら話す「先生口調」のような音調か?)

文末の「ひくめ音調」(先行する文の追加であることを示す)

非文末の「ひきのぼし音調」(「アー」や「エー」と類似のもの)

3-1-2. 問題点と改良版イントネーション分類

以上見た通り、上村(1989)は文末とそれ以外のポーズ直前に現れるイントネーションを分けた上で11種に分類した。しかし、会話では書き言葉のように「。」で完結させることのできるような「文」が必ずしもあるわけではなく、「文」末の認定が困難な場合も多い。そこで、第一に音

調別にイントネーションを分類し、その上で、それぞれの型が「文」のどこに現れるのかを見ていくほうがいいのではないかと考える。つまり文末、非文末はイントネーションの現れる位置の特徴の一つだと考えるのである。このように音調別に見ると、先に見た通り、上村(1989)の分類は上記の8種に分類しなおすことができると考えられる。

さらにまたこの8種の中で以下の3点は改良の余地があるのではないかと考えた。第一に、文末の「くだりのぼり音調」は、「聞き手に対する働きかけ」という面では機能が文末の「のぼり音調」と共通する点が多く、音声的にもその亜種と考えられるので一つにまとめるべきではないだろうか。実際「くだりのぼり音調」は音声的には「昇降調」と相対するパターンを持っており、単なる下降パターンではなく、「上昇+下降」パターンを持つ「昇降調」を認めるなら、単なる上昇パターンではない、「下降+上昇」パターンを持つ「くだりのぼり音調」、「降昇調」も認めるべきだという立場も考えられる。しかし、機能的には「聞き手に対する働きかけ」という点で「上昇調」との共通点が大きく、さらに、下降部分は上昇を際立たせるための手段と考えれば、本質的には「上昇」に含めてもいいのではないかと考え、ここでは特に独立の型としては扱わないことにした。

吉沢(1960)も「反問」を疑問の上昇調である「昇調1」に含めているし、郡(1997)も、モダリティ表示機能の有無を区別する点からは、上昇や下降の程度の細かい差は重要ではなさそうだと考えを示している。さらに後述(3-2-3)する日本人を対象にしたイントネーションの聴取実験調査からも、上昇調と反問のイントネーションの聞き分けは概して容易ではないことが伺える。ただし、この点に関しては第5章で再び言及し、再検討を加えることになる。

第二は非文末の「くだり音調」についてだが、これはいわゆる「尻上がり」イントネーションであるので「くだり」というよりは、「のぼりくだり」というべきだろう。「のぼり」部分は必ずしも観察可能ではないが、多くの場合、小さいながらも上昇部分が確認できる。それに、いわゆる「尻上がり」イントネーションに関しては、井上(1994)や川上(1992, 1993)も「昇降調」と呼び、後述するように、郡(1997, p.190, p.195)も、文末イントネーションの型の一つとして「上昇下降調(強調上昇+下降調)」を挙げている。したがって「くだり音調」は「のぼりくだり音調」とするべきだ。そうすれば文末の「くだり音調」とも名称の上で区別が可能になる。

第三は、全体が短く低いという特徴を持つという「ひくめ音調」についてだが、これは当該拍だけを見れば「基本音調」と区別が付きにくいと考えられるため、「基本音調」と統合しても問題ないと考えられる。

これらの三点を踏まえ、名称を変えて以下のように6種に再編することができる。それぞれの典型的なピッチパターンは図Ⅲ1-1~6に示す。ピッチパターン下の記号は各音声の出典を示す(出典一覧は資料B参照)。

平調(上村の「基本音調」及び「ひくめ音調」) 記号なし

上昇調(上村の文末の「のぼり音調」及び文末の「くだりのぼり音調」、非文末の「のぼり音調」及びいわゆる「擬似疑問」など) 記号は↑

下降調(上村の文末の「くだり音調」、あるいは落胆したような調子) 記号は↓

昇降調(上村の非文末の「くだり音調」、いわゆる「尻上がり」イントネーション) 記号は∧

強調(上村の文末、非文末の「つよめ音調」、非文末の「のぼり音調」) 記号は>

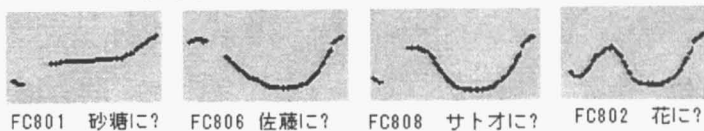
停滞調(上村の「ひきのばし音調」) 記号は→

図Ⅲ1 各イントネーション型の典型的ピッチパターン

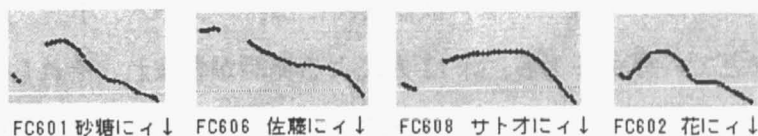
図Ⅲ1-1 平調



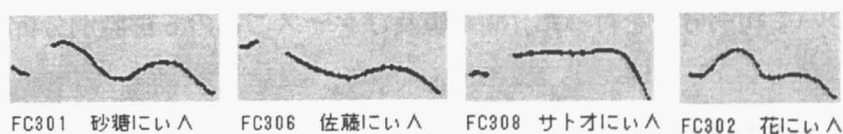
図Ⅲ1-2 上昇調



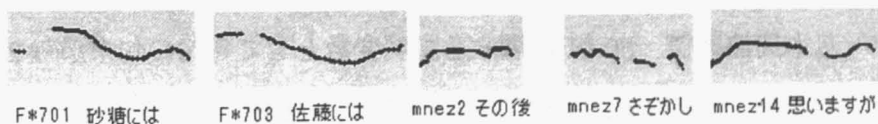
図Ⅲ1-3 下降調



図Ⅲ1-4 昇降調



図Ⅲ1-5 強調



図Ⅲ1-6 停滞調

